

(中間報告) 五輪報道のジェンダー表象
～北京、ロンドン、リオ・デ・ジャネイロの比較を通して～

山形大学 小林直美

1. 研究目的および背景

オリンピックはテレビ向けに演出された最も大きなスポーツ・メガイベントの1つである。このようなオリンピックはテレビニュースの報道量も多く、視聴率の高いコンテンツである。同時にオリンピックに関する情報を発信するテレビをはじめとするメディアは、人々の女性スポーツに対する認識に影響を及ぼす。ゆえに Lenskyj は、ジェンダー・ポリティクスとオリンピック産業のインターフェースナリティという視点から、規範的言説を流布するメディアを批判的に分析することの必要性を述べている (Lenskyj 2008)。

本研究の目的は、第1に、北京、ロンドン、リオ・デ・ジャネイロオリンピックの3大会開催期間中の日本のテレビニュースで取り上げられたオリンピック選手のジェンダー分析を通して、人々の生活世界におけるジェンダー秩序と構造の一端を明らかにすることにある。第2に、オリンピック報道における選手のジェンダー表象について経年比較することによって、その変化を明らかにする。本発表は2年間の継続研究の中間報告であり、今回は3大会のうちロンドンオリンピックの内容分析結果について報告する。

2. 研究方法

本研究は、日本のキー局で夜に放送されている5つのニュース番組を分析対象とし (図表1)、分析期間はオリンピック開始4日前の2012年7月24日からオリンピック終了4日後の8月16日までの合計24日間である。国際テレビニュース研究会が行った2012年ロンドンオリンピックの内容分析データを使用し¹⁾、オリンピック選手のジェンダー表象12項目について再コーディングを行った。なお、本研究の分析単位は、1本のニュースの中で主人公として取り上げられた「選手」をカウントした報道回数である。

図表1：分析対象番組

番組名	放送日	ニュース本数 (秒)
『NHK ニュース 7』(NHK)	月曜～日曜	85本 (15,758秒)
『NEWS ZERO』(日本テレビ)	平日	64本 (19,427秒)
『NEWS23X』(TBS)	平日	73本 (14,508秒)
『NEWS Japan』『すばると！』(フジ)	平日	136本 (17,110秒)
『報道ステーション』(テレビ朝日)	平日	67本 (20,499秒)

3. 結果

報道される選手の国籍は日本代表選手で約9割を占め、うち約5割が女性選手で占められていた (図表2)。ニュースで取り上げられた競技は、日本がメダルを獲得した競技で全

体の81.6%を占めていた。また、プロスポーツで人気のある競技もよく報じられていたが、その一方で全く取り上げられなかつた競技もあった。これらのことから、自国のメダルを獲得した競技結果に特化したニュース内容であった。

図表2：選手の「国籍」×選手の「性別」

国籍	女性	男性	混合	計
日本	424 (48.8%)	356 (41.0%)	12 (1.4%)	772 (91.2%)
その他	44 (5.1%)	31 (3.6%)	1 (0.1%)	76 (8.8%)
合計	464 (53.9%)	387 (44.6%)	13 (1.5%)	848 (100.0%)

女性選手のプライバシー、容姿、表情・感情についての提示が男性選手と比較すると多くあり、能力以外の点に注目した愛称も見受けられた。また、女性選手を子ども扱いした「(○○)三人娘」、「○○ちゃん」、男性選手を標準・基準とした「スカートをはいたペレ」、「女ジダン」という表現があった。これらの点に関しては、女性選手へのジェンダー・バイアスが残っているといえよう。

しかし、女性選手の技術や身体能力は素晴らしいものとして評価されており、男性選手と比較して低質という言及はなかった。したがってオリンピックに参加する女性選手に対するジェンダー・バイアスは、技術の高さや身体能力の点で無くなりつつあると思われる。

4. 考察および自己評価

ロンドンオリンピック日本代表選手の性別構成は、女性選手の方が多く（女性 53.2%、男性 46.8%）、メダリストは男性選手の方が多いかった。しかしながら報道回数はメダリストが少ない女性選手の方が多い（図表2）。この点については、選手数に比例した報道であったといえよう。ただし、メダル獲得が期待された男性選手の成績が振るわなかつた影響もあるため、この結果をもって性別による報道格差がなくなったと判断することは早急である。

一方、オリンピック期間中、女性選手は「プライバシー」や「容姿」、「表情・感情」等、能力以外のさまざまな要因によって注目を浴び、男性選手と同等、あるいはそれ以上にニュース・バリューが高いことが推測される。その一例として、「女らしさと強く結びつくスポーツやジェンダー差を強調するユニフォームを身につけるスポーツに参加する女性選手は比較的多くの報道を受ける」（Bruce eds. 2010）という先行研究と同様の傾向が、女性選手の報道回数トップ10にみられた。すなわち、報道回数2位の吉田沙保里選手、6位の鈴木聰美選手、8位の伊調馨選手、10位の寺川綾選手である。さらに、国アイデンティティに歴史的に結びついたスポーツにおいてメダルを獲得した女性選手は比較的多くの報道を受ける（Bruce eds. 2010）という先行研究については、女性選手の報道回数トップ10のうち、柔道で金メダルを獲得した松本薰選手が4位であり、先行研究と同様の傾向といえよう。

米国のインターネットメディアの解釈は従来の「pretty or powerful」から「pretty and powerful」という言説に変化している(Bruce 2015)ことが指摘されている。日本のテレビニュースにおいても女性選手の身体能力や技術の高さ、美しさ等についての表象は同時に存在していた。例えばレスリングでオリンピック3連覇を達成した吉田沙保里選手は「靈長類最強の女性」と称される一方で、かっこよさ、美しさについても言及されていた。また水泳の銅メダリスト寺川綾選手も「美少女スイマー」と取り上げられながら、競技技術や身体能力の高さについて評価される内容が見受けられた。これらは日本の主流メディアの1つであるテレビニュースにおける、女性選手の新たなメディア表象、あるいは多様性の現れともいえよう。しかし金メダルを獲得した柔道の松本薰選手に代表されるように「気迫」に満ちた「感情・表情」が注目を集めており、こちらは従来の「pretty or powerful」のメディア表象といえよう。

研究の自己評価としては、これまで分析対象とされてこなかったテレビニュースにおけるロンドンオリンピックの女性・男性選手のジェンダー表象に関する内容分析を行ったことに一定の意義があると思われる。

5. 今後の研究課題

今後の課題は3つある。第1に、北京・リオオリンピックの内容分析を行い、各大会の選手のジェンダー表象の傾向を明らかにすること。第2に、男性選手やセクシャル・マイノリティの選手のジェンダー表象に焦点をあて、質的分析やジャーナリストのインタビューを交えて分析を行うこと。第3に、各大会のジェンダー表象の経年比較を行うこと。この3点を通じ、日本のテレビニュースにおけるオリンピック選手のジェンダー秩序と構造を明らかにしていきたい。

注

- 1) 国際テレビニュース研究会は、2012年ロンドンオリンピックのテレビニュース番組のデータを保有している。筆者は国際テレビニュース研究会に2004年から参加し、ロンドンオリンピックのテレビニュース内容分析調査に従事しているためそれらのデータを利用した。

参考文献

- Bruce, Toni, Hovden, Jorid and Markula Pirkko ed., 2010, *Sports Women at the Olympics: A Global Analysis of Newspaper Coverage*, Sense Publishers.
- Bruce, Toni, 2015, "New Rules for New Times: Sportswomen and Media Representaion in the Third Wave," *SEX ROLES A Journal of Research*, vol.73 (3/4):1-16.
- Lenskyj, Jefferson, 2008, *Olympic Industry Resistance: Challenging Olympic Power and Propaganda*, State University of New York Press.